

ティーチング・アシスタントを活用した 第二外国語中級教育

武田 裕紀

Utilising a French native speaker in intermediate classes

TAKEDA Hiroki

ティーチング・アシスタントを活用した 第二外国語中級教育

武田 裕紀
(追手門学院大学)

Utilising a French native speaker in intermediate classes

TAKEDA Hiroki
(Otemon Gakuin University)

【キーワード】 ティーチング・アシスタント、フランス語

はじめに：

2019年度のカリキュラム改変により「フランス文化演習」が新設されることになった。この科目は、フランス語の基本を半年から1年学んだ学生が、フランスの文化・社会・歴史・風土を演習形式で調べながら、中級レベルのフランス語を学習していくものである。この開講の準備として、2018年度にティーチング・アシスタント（正確には諸々の理由からステューデント・ジョブ、以下ではアシスタントと略記することにする）を雇用して、表題の「ティーチング・アシスタントを活用した第二外国語中級教育」を実践した。なお、同様の取り組みは2017年度秋学期にも試行しており、本報告は2017年秋学期から2018年春学期を対象としている。

対象科目：

2017年秋学期「フランス語読解中級2」…文法テキスト（『ラフォレ』朝日出版社）の最後の4課（条件法、接続法など）を学び、フランス語文法の完成を目指す。

2018年春学期「実用フランス語1」…実用フランス語検定4級から3級の合格を目指した実践的な科目。すでにフランス語文法を履修し終えた者、あるいは「フランス語中級1」を平行履修しながらフランス語文法を体系的に履修しつつある者を対象とする。

被雇用者：

本学留学生のトーヴァン・ナスタジア。外国人に対するフランス語教育の経験はないが、それだけに却って標準的なフランスの若者がもつフランスに関する知識や言語運用能力を、受講生たちは間近に感じ取ることができたのではないかと。たとえば、フランス文化を説明するさいの明晰さ・手

際の良さは、フランスにおけるディッセルタシオン教育の賜物であり、同じ年代の若者のプレゼンテーションとして刺激になったはずである。

目的と授業内容：

2017年秋学期「フランス語読解中級2」（半期に3回程度）

フランス語で意志疎通を図ることで、これまでの授業での学習内容がコミュニケーションに有益であることを実感できるようになることを目的とする。

①習った文法事項を用いて質問を用意する。授業の中で、文法事項や言い回しが適切であるよう指導する。（具体例）疑問形容詞を習ったなら、それを使った質問を用意する。②翌週、アシスタントがその質問に対して回答する。③学生にアシスタントの回答を理解できたか尋ねる。④教員がフランス語を板書して、単語や文法を解説したのち、⑤学生からさらなる質問を受け付ける。そのさいにできるかぎりフランス語で質問させる。

2018年春学期「実用フランス語1」（半期に4回程度）

フランス文化について、フランス人の体験を直接聞くことで、より具体的なイメージをもてるようになることを目的とする。

①フランスの生活や文化に関する1分くらいの簡潔な説明をアシスタントに用意してきてもらう。（具体例）クリスマス、復活祭などの年中行事、フランスの教育制度やヴァカンスなどの社会制度やライフスタイル。②教員がキーワードのみ板書して、詳しく説明を加える。③アシスタントにもう一度同じ説明をしてもらい、学生には理解できた範囲で日本語で要約してもらう。④学生や教員がさらに踏み込んだ質問をアシスタントに投げかけて、回答してもらう。

成果：

検定などの具体的成果としては以下の通り。

実用フランス語検定4級合格（2018年春学期）1名

実用フランス語検定3級合格（2018年度秋学期）1名

総括

仏検の結果にも現れているように、学習効果はかなり高い。とくに、ネイティヴの発音を生で繰り返し聞くことによる耳の訓練は、貴重である。ネイティヴのフランス人と会話できる機会は日本ではそれほど多くないので、協力してもらえるフランス人留学生がいれば、引き続きこのような授業を展開していきたい。ただし、常にフランス人留学生が在学している保証はなく、また留学生自身も時間割による制約があるので、正規のシラバスに組み込んでいくのは難しいと思われる。フランス人アシスタントを雇用できない場合でも、フランスの生活や文化に対する学生の関心は高いので、教材として積極的に取り入れていくことは継続していきたい。

本取り組みは、体系的な文法学習や仏検対策のカリキュラムにしっかりと組み込まれていることが特徴である。いわば背骨がしっかりしているので、コミュニケーションスキルが上滑りすることなく、総合的な言語能力として受講生の血肉になる、このことが、仏検3級合格者の輩出につながったことと思われる。なお当該学生は、2017年秋学期には本科目のほかには「フランス語表現中級2」を履修し、2018年春学期には「実用フランス語1」を履修したのみであった。週1, 2回の授業であっても、このような工夫によって3級レベルまで到達できることを示すことができた。

ただし、2019年次以降は本学の方針により、フランス語文法の体系的な学習が許されなくなった。いわば背骨を失った状況で開講される「フランス文化演習」が、同様の効果を実現できる可能性はきわめて低く、有望な若者たちの可能性を狭めることになるのは本学教員のひとりとして慙愧に耐えない。

